

<エアボーン24>日米部隊 強風の中を飛行、相互運用性を強化 *U.S.-Japan soar through heavy winds for Airborne 24*

March 18, 2024

By Staff Sgt. Spencer Tobler
374th Airlift Wing Public Affairs

3月7日、夜明け間近の身の引き締まる寒さの中、横田基地のフライトラインには容赦なく風が吹き荒れた。第374空輸航空団のC-130Jスーパーハーキュリーズの約半数の機体、米陸軍の空挺兵、約300人の陸上自衛隊の空挺隊員は、世界最大規模のスタティックライン降下訓練「エアボーン24」を実施する準備を整えていた。

エアボーン24は、年次戦術空輸訓練である以上に、日米の部隊間の継続的なパートナーシップの一環で実施される。インド太平洋地域全体の安定と安全保障を維持する揺るぎない共通の決意を示す確かな証である。

今年は、これまでとは異なり、空挺隊員が陸上自衛隊東富士演習場ではなく、(鹿児島県)喜界島に降下する前例にないミッション計画が立てられた。訓練は、日本の南部の島に部隊を迅速に投入する陸上自衛隊の能力を実証し、二国間で作戦を行う戦略的意義を示すことを目的に行われた。

第36空輸中隊C-130Jスーパーハーキュリーズの操縦士兼エアボーン24のプロジェクト主任アンドリュー・モリス少佐は、「富士の投下地帯では、毎回島嶼占領をシミュレートしていた。喜界島に場所を移したのは、実際の島に投下するためである。有事が起きる島の防備を固めなければならないときに、まさに実践する作戦を演練するため」と演習について説明した。

しかしながら、あいにくC-130Jが指定の投下地帯に進入したとき、風速が22ノットに達し、空中投下の演習は中止となった。

第36空輸中隊C-130Jスーパーハーキュリーズ操縦士兼エアボーン24の任務指揮官グレゴリー・フランクリン少佐は、「輸送機が近づいてくるのを目視できた」と述べ、「投下できなかったことは正直残念だったが、悪天候では仕方がない」と話した。

空挺降下は実施できなかったものの、日米の部隊は3つの大隊相当数の空挺隊員を日本の南部の小さな島上空から投下するために必要な準備、調整、緻密な計画において成功をもたらした。

フランクリン少佐は、「全ての航空機を機動し、空挺隊員全員をタイミングよく投下地帯まで輸送した」と説明し、「二国間の相互運用性を強化することができた。日本のパートナーとの訓練は有益だ」と続けた。

エアボーン24のような二国間の作戦行動は、鉄壁の日米同盟を強化し、能力と相互運用性を高める。

フランクリン少佐は、「言葉の壁や、方法の違いはあるかもしれないが、結局のところ皆が同じ目標に向かっていて、実戦で共に高いレベルで対処できるよう、連携して訓練する必要がある。こうした訓練は両国の安全保障のために極めて重要だ」と述べた。

